

徳島市三谷遺跡の研究 1

－徳大1・2次発掘調査成果から－

中村 豊*

*徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

はじめに－調査の意義と目的－

徳島市三谷遺跡(写真1)は、縄文時代晩期末から弥生時代前期への移行期を中心とする遺跡である。過去に2度ほど調査がおこなわれ、下記の4点など、重要な歴史的意義を提供してきた。

1つは貝塚など廃棄場が検出され、当該期の生業が復原できる点である。とくに、貝塚出土の動物骨・堅果類と栽培植物(イネ・アワ・キビ・アズキ)との共存から縄文/弥生移行期の生業、すなわち農耕の起源を考える上で、きわめて重要な遺跡といえる。

2つ目は凸帯文土器と遠賀川式土器が共存している点である。これらの土器が、互いに影響を与えあって展開していく様相を考える上で重要である。

3つ目は石棒祭祀が盛行していることである。石棒は縄文文化を代表する文物であり、三谷遺跡のみならず、農耕開始期の地域社会、列島西部の地域間交流を復原する上で重要である。

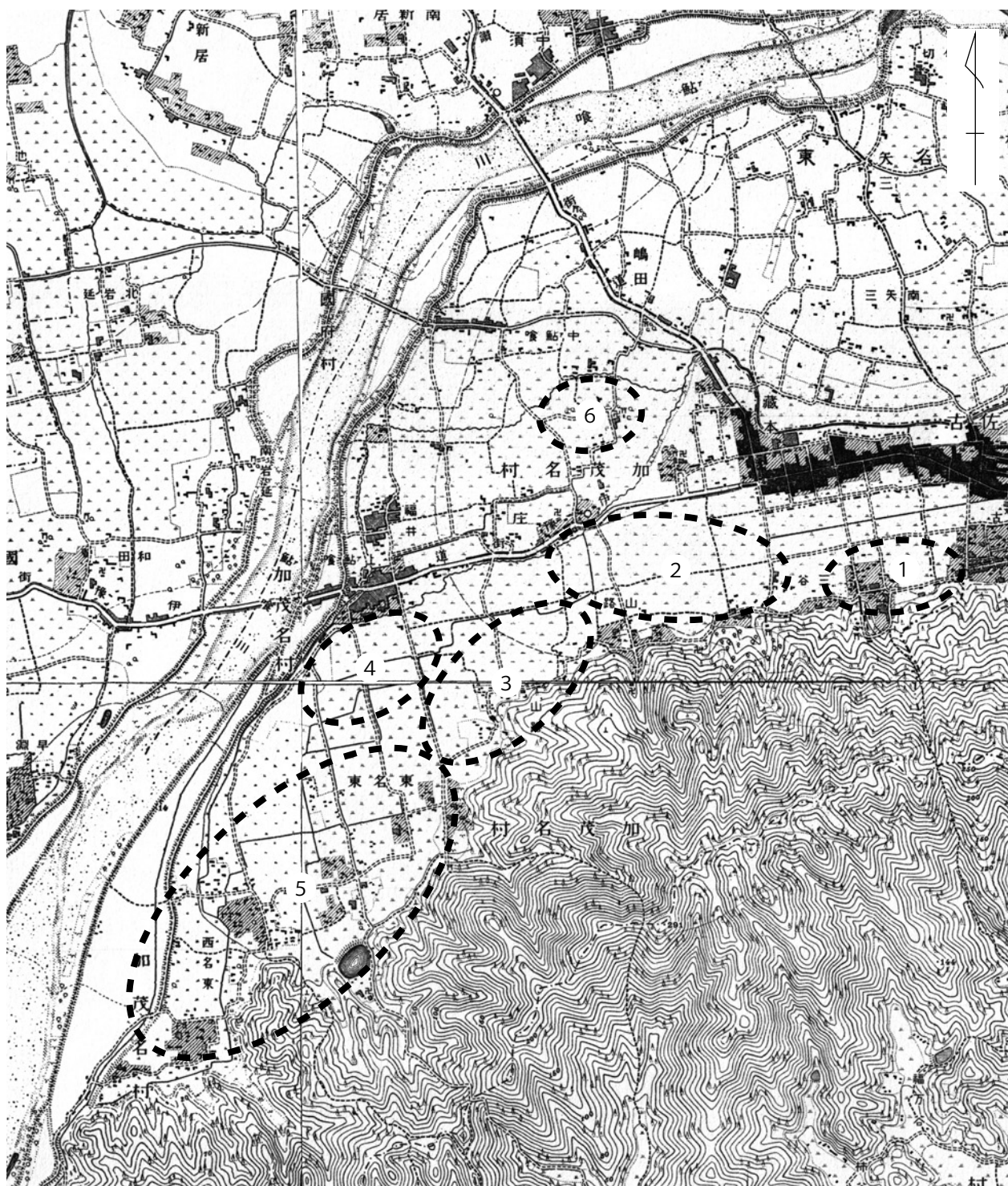
4つ目は代表的な初期弥生集落である徳島市庄・蔵本遺跡が、わずか西方約500mに位置することである。両遺跡の比較検討は、縄文/弥生両時代の移行史を考える上で、貴重な情報を提供するであろう。

これまでの三谷遺跡の調査では、集落縁辺部の廃棄空間や祭祀空間の調査に限られているので、今後の検討課題は、生活域や生産域が乗ると考えられる微高地の位置を探り、可能な限り上記4つのテーマにせまるところにあるといえる。

これらの諸課題に取り組む目的で、徳島大学総合科学部考古学研究室では、2014年～2016年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究C26370897『縄文/弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究』)を活用して徳島市三谷遺跡の発掘調査を継続している。ここでは、2015年2・3月におこなった第1次調査、同9月におこなった第2次調査(以上、三谷遺跡徳大1・2次調査)の成果を報告することとする。なお、第3次調査(三谷遺跡徳大3次調査)は2016年2・3月に予定している。

1. 遺跡の立地と環境

吉野川下流の海岸線は、縄文海進期において現JR高徳線からさらに西方にいたるまで侵入する三角江を形成したと考えられている(阿子島1972、古田1996・1999、中尾1997)。その後も徳島平野の三角州形成は遅れたと考えられ、海蝕痕の残る旧臨海部の丘陵付近を除いて、出土する遺物の多くは平安期以降である。旧砂堆と考えられる微高地からも、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が出



1 三谷遺跡 2 庄・蔵本遺跡（南蔵本遺跡・庄遺跡・蔵本遺跡）
 3 南庄遺跡 4 鮎喰遺跡 5 名東遺跡 6 中島田遺跡
 （※正式二万分一地形図集成中国・四国Ⅰ徳島・小松島浦・高畑・石井より）

第1図 周辺の遺跡 1:25,000

土することは多くはない。これは、大阪平野や太田・黒田遺跡を擁する和歌山平野などと比較しても際立つ特徴であると考えられる。一方、縄文海進期の沿岸部に相当する鮎喰川下流の扇状地性の平野では、縄文時代中期末からいち早く居住可能な微高地を形成した。たとえば、鮎喰川左岸の徳島市矢野遺跡では、当該期の集落跡がみつまっている。

今回の研究対象となる三谷遺跡の位置する徳島市眉山北西麓、すなわち鮎喰川右岸の沖積平野では、縄文時代後期後葉以降の遺跡が多数確認されており、縄文時代晚期末・弥生時代前期初頭以降は、県内屈指の遺跡密集地となることがわかっている（第1図）。

かつて鮎喰川の有力な一分流は、眉山に沿って北東方面に流れていた。これは、1947年米軍撮影の空中写真判読や発掘調査から旧河道（開析谷）^{註1)}が復原されたものである（阿子島・黒田 1978、瀧山 1988、古田 1996・1999）。この開析谷は、山麓に形成された崖錐状の微高地を避けるように蛇行するとともに、蛇行部の凹岸側にもポイントバー状ないし中洲状の微高地を持っておりこれら両岸微高地を中心に各遺跡は展開するのである。

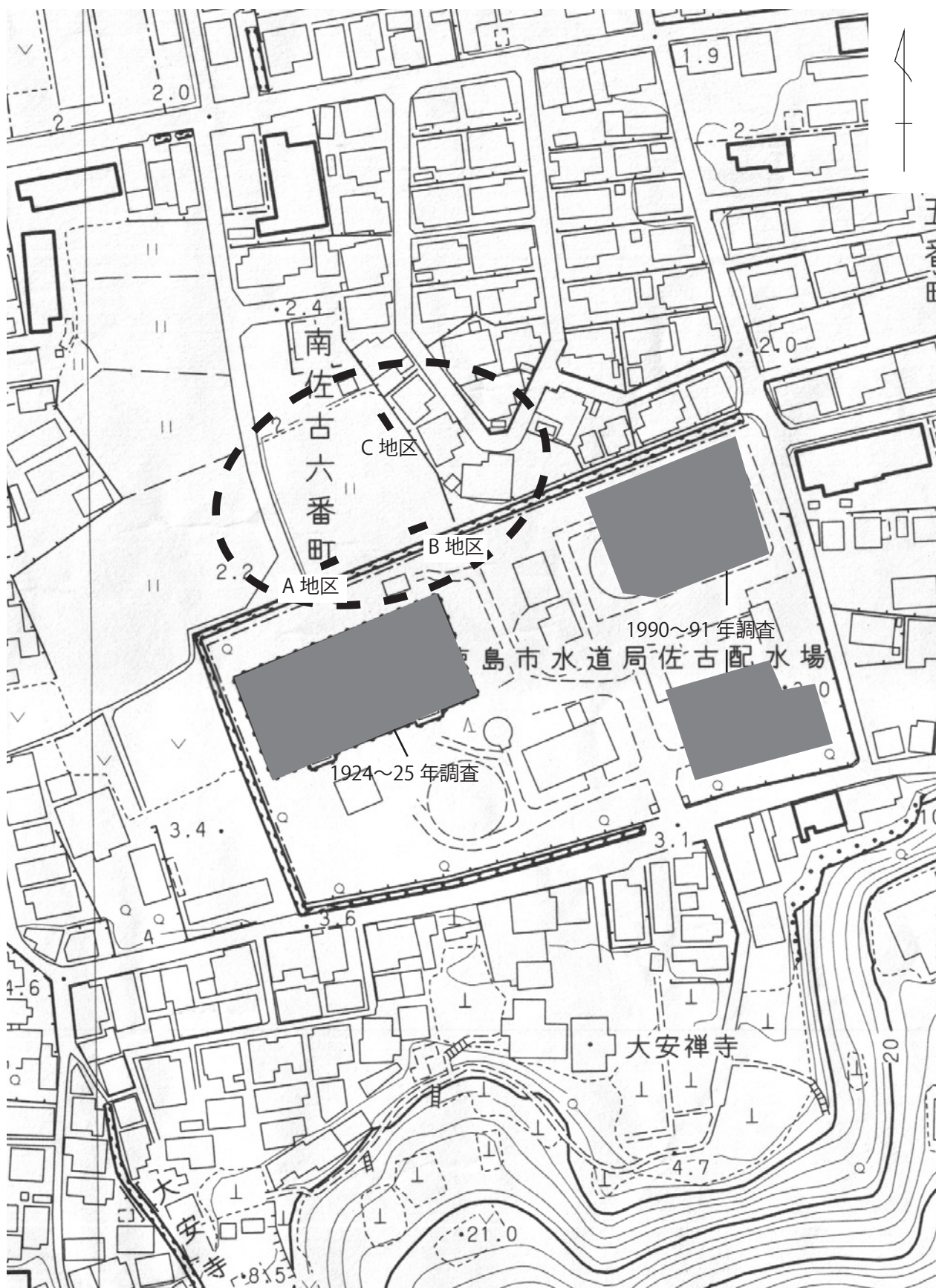
三谷遺跡（第1図1、写真1）は、縄文海進期の沿岸部付近に相当する眉山北麓の南佐古六番町に位置する。既に2次にわたる調査がおこなわれており、縄文時代晚期末・弥生時代前期初頭を中心とする遺跡であることが判明している（森 1926a・b、勝浦編 1997）。弥生時代前期中葉には廃絶され、弥生時代前期末・中期初頭におこった大規模な洪水砂の堆積以降は、拡大した微高地を積極的に利用していく。

三谷遺跡の西方500mほどのところには庄・蔵本遺跡（第1図2）^{註2)}が位置する。庄・蔵本遺跡では、遺跡西端部の旧大蔵省蔵本団地地点において、縄文時代後期後葉および晩期中葉の開析谷と、それに隣接する集落跡がみつまっている（森本・湯浅 1996、前川 1997、岡山 1999）。続く縄文時代晚期末・弥生時代前期初頭の遺構・遺物は、大学構内南西端～山麓（北條編 1998、勝浦 1999）と南東端～山麓（中村 2010、近藤編 2014）の2か所に点在する。弥生時代前期中葉には集落が拡大し、開析谷を水源とする大規模な灌漑施設や水田遺構がみつまっている。この灌漑施設や水田遺構は弥生時代前期末・中期初頭には埋没し、廃絶されるが、拡大した微高地には有力な遺跡が営まれ続ける。

庄・蔵本遺跡の西南に隣接する南庄遺跡（第1図3）は、弥生時代前期末・中期初頭に形成された微高地上に、集落が断続的に営まれている（瀧山 1989）。弥生時代中期後葉の集落跡からは、藍閃石片岩製の柱状片刃石斧未製品が多量にみつまっている。眉山は藍閃石片岩の有数の産地として知られており、原石を得て交易目的で製作されていたものと推察される。

南庄遺跡の西南方・眉山の西麓には、鮎喰遺跡（第1図4）・名東遺跡（第1図5）が立地する。鮎喰遺跡では、弥生時代前期初頭の集落が乗る古い微高地が存在する。弥生時代前期末・中期初頭以降は微高地が拡大したようで、弥生時代後期後半以降の遺物が多くみられる。名東遺跡では、天理教施設建設に伴う調査において、三谷遺跡に若干先行すると考えられる縄文時代晚期末の凸帯文土器がみつまっている（勝浦 1990）。名東遺跡でも弥生時代前期末・中期初頭以降微高地の拡大がみられ、弥生時代中期以降大規模な遺跡が確認されている。ここでは埋納銅鐸（扁平鈕式六区袈裟襷文）がみつかり、また計30基を超えるような方形周溝墓群がみつまっている。

上記の遺跡群は、いずれも弥生時代終末期をひとつのピークに規模を縮小し、古墳時代を通じて大



第2図 調査地の位置 1:1,500

規模な集落跡は見出されていない。眉山北麓では古墳そのものも多くはない。一方西麓では積石塚の前方後円墳である八人塚古墳をはじめ、前期・後期を中心とする古墳群を形成する。

古代・中世以降の遺構・遺物は、比較的多くみつまっている。奈良・平安前期にかけて、弥生時代前期末以後も残った開析谷などの起伏を埋めるような整地痕も認められる。とくに庄・蔵本遺跡西半一帯^{註3)}では、巡方や墨書土器など、官衙的な性格の施設をうかがわせるような遺物が多く出土する(福家 1984、中村編 2005)。一方、三角州地帯においても荘園開発などはおこなわれつつあったと考えられるが、黒色土器などが断片的に出土するにとどまっている。鎌倉期にいたって、中島田遺跡(第1図6)にみられるように、三角州地帯においても、ようやく大型の集落が営まれるようになってくる。三角州地帯では、地域の中心となるような大型の遺跡は、中世を通して、中島田遺跡、板野郡藍住町守護町勝瑞周辺、徳島市川内町大松遺跡などを数えるくらいである。

近世以降は、城山を核とする三角州地帯に徳島城下町が整備され、沿岸部に新田開発が及ぶようになる。ここにいたってようやく三角州地帯の開発が本格化する。

鮎喰川も蓬庵堤が築かれるとともに、現在の位置に固定される。眉山北西麓には名東用水が開削され、再び水田化された様相がうかがえる。

2. 既往の調査

三谷遺跡(写真1)では、これまでに2次にわたる調査がおこなわれてきた(第2図)。1924・25年には、徳島市水道局三谷濾過池建設にともなって、すでに東京帝大人類学教室を去っていた鳥居龍蔵・小松真一の指導のもと、森敬介担当の調査がおこなわれた(森 1925a・b、小川・森 1960)。貝塚、竪穴などとともに、縄文土器(アイヌ派)・弥生土器(固有日本人)、石器(「大石棒」2点など)、丸木舟(実際は流木)などが出土している。森は、砂層・粘土層の堆積状況と、貝塚や竪穴・石棒などが調査地南東から北西にかけて展開し、流木が調査地北東に分布する様相から、開析谷南西側の岸部が、北西から南東へ向かって展開する様相を復原している^{註4)}。すなわち、濾過池の南西側の微高地上に生活空間がのり、開析谷へ向かうような位置に貝塚などが営まれ、北東側の開析谷を埋める砂層に流木がみられるという様相である。出土遺物には、石棒2点のほか木葉文を持つ遠賀川式土器壺(森 1930)や「装飾把手を有する四国随一の薄手派アイヌ土器(森 1925a・b、小川・森 1960)」などがみられたが、今日所蔵先は知られていない。

1990・91年には、徳島市教育委員会によって徳島市水道局南佐古浄水場増築工事に伴う調査がおこなわれた(勝浦編 1997)。浄水所東半に2か所の調査区(南側:Ⅰ区、北側:Ⅱ区)が設定された。眉山麓に相当するⅠ区からは、旧河道(開析谷)が検出されるも、遺物の出土はほぼみられなかった。また、近世の溜池跡も検出されており、Ⅰ区付近が低湿であったことがわかる。Ⅱ区からは、北側調査区外に展開する微高地から南側の開析谷へ向かう移行部の自然凹地に貝塚が形成され、凸帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土するなど、多量の遺物が廃棄されていた。貝塚からは7体にもおよぶイヌの埋葬がみられ、22点にもおよぶ石棒が出土していること、骨角製の玉類(川添 2012)や有文精製土器が多く出土していることなどからみて、単なる廃棄場ではなく、祭祀の場も兼ねていた可能

性が高いと考えられる。中部高地の土器（氷Ⅰ式土器）や在地産とは考えがたい胎土を有する凸帯文・遠賀川式土器、風化面の顕著なサヌカイトの大型剥片なども多くみられ、外部にも開かれた地域を代表する中心的集落であったと考えられよう。また植物質食糧は、イチイガシのほかアズキ、イネが出土し、レプリカ法からアワ・キビの存在が知られている（中沢ほか 2012）。すなわち、すでに農耕を開始していたのである。貝塚はⅡ区南側のみならず、東端にもみられることや地形の判読などから、開析谷は調査区東側で大きく蛇行し、北東方向に向かっていた可能性が高い。

1924・25 年、1990・91 年の調査とも貴重な資料が出土しているものの、いずれも開析谷近辺の低湿地に面した廃棄空間や祭祀空間であり、微高地上に営まれた生活域や生産域の様相は明らかではない。とくに、石棒未製品が出土することから、石棒を製作した遺構や、イネ・アワ・キビ・アズキなどの生産域を探ることは極めて重要な課題である。そこで、徳島大学による調査では、微高地や開析谷の位置を確定することによって、三谷遺跡の景観復原へむけての情報をえて、可能であれば居住域や石棒製作跡、生産域などを探る手がかりをえたい。周辺は宅地化が進み、わずかに耕作地を残すのみとなっている。三谷遺跡の研究は今まきにおこなわなければその機会を半永久的に失う状況にあるといえるのである。

3. 徳大第 1 次調査

(1) 調査の経過

第 1 次調査は 2015 年 2 月 16 日から 2015 年 3 月 16 日までおこなった。調査体制は以下の通りである。

調 査 員 端野晋平（徳島大学埋蔵文化財調査室長・准教授）、三阪一徳（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）、脇山佳奈（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）

調査補助 入口成味、藤丸七海、松村幸奈、福田有賀、門出有芳葉、朝野友一、内田紗希、近藤 里、他徳島大学総合科学部学部生

調査協力 東 玉子（土地所有者）、城 明弘、三木治郎、米沢忠之

調査指導 勝浦康守（徳島市教育委員会）、近藤 玲（徳島県埋蔵文化財センター）、高島芳弘（徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）、早淵隆人・西本和哉（徳島県教育委員会）、湯浅利彦（徳島県立小松島高等学校）

調査担当 中村 豊（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授）

(2) 調査地の位置

既往の調査地（第 2 図）は、すべて徳島市水道局佐古浄水場敷地内である。現時点で佐古浄水場敷地内での調査に向けた動きはとっていない。また、佐古浄水場の北側、東側、南側の東半分、西側南半分は宅地化によって調査できない状況である。一方、浄水場北側西半の耕作放棄地と、同西側北半の屋敷畑のうち作物を植えていない部分は、今回土地所有者のご好意によって調査許可を得ることができた。微高地の存在が想定できる屋敷畑の調査は、耕作もあり、宅地に近いこともあるので、十分な関係を築いてから後年おこなうこととし、まずは浄水場北側西半の耕作放棄地において調査を着手

することとした。既往の調査地が浄水場敷地内ということもあるので、極力敷地に近い部分に A・B 計 2 か所のトレンチを設定した（第 2 図）。

既往の調査成果からみて、開析谷の西岸が 1924・25 年調査地の濾過池中心部を北西から南東へと向かい、東岸が 1990・91 年調査地をかすめて北西から南東へ向かっている。すなわち、埋没開析谷が浄水場の敷地を北西方面から南東方面へと向かい眉山の山裾で北東方向へ急転して蛇行している様相を想定できた。調査目的である微高地の位置は、浄水場西側の崖錐状の高まりと、北側のポイントバー状ないし中洲状の高まりに想定できたが、西側は先の理由によって後回しとし、北側の微高地と開析谷との位置関係把握を第一の目的とした。

(3) A 地区の調査

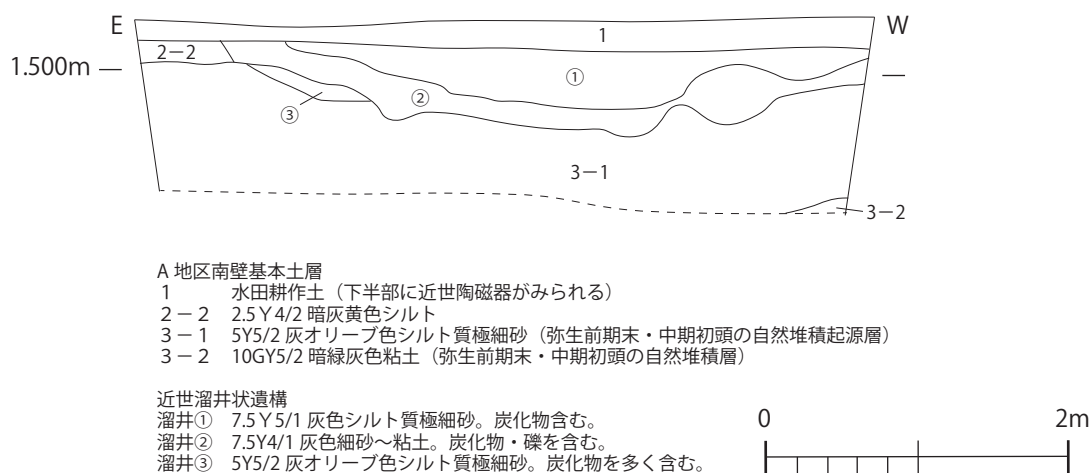
A 地区は、浄水場北側の耕作放棄地南西部分に設定した（第 2 図、写真 2 奥、写真 3）。現地表は標高 1.8 m ほどである。調査面積は 10 m² である。既往の調査や空中写真、西側隣接地に小規模な溜池が位置する^{註 5)}ことから、低湿な開析谷に相当すると考えられた。この推定を確かめる意図をもって調査区を設定することとした。

基本層序

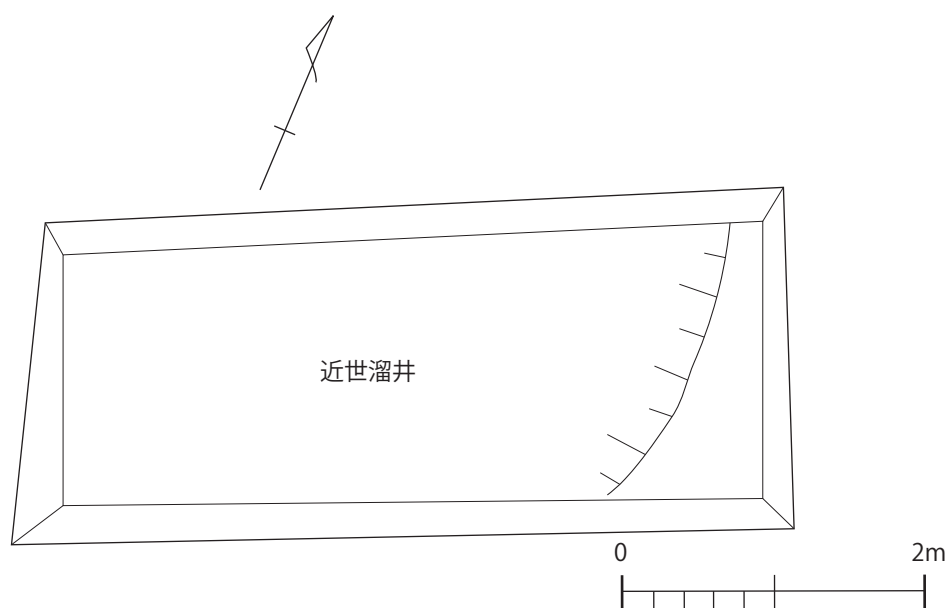
第 1 層は水田耕作土である。15cm ほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。第 2-2 層は暗灰黄色シルト層で、弥生時代前期末～古代にかけての旧地表（土壌化層）であると考えられる。第 3-1 層は灰オリーブ色シルト質極細砂層である。第 3-1・2 層は、開析谷を埋め、周辺に洪水砂を提供する砂層であると考えられる。上端部には乱された痕跡が認められる。遺物の出土は確認できなかった。標高約 0.5 m まで同じ層が続くことを確認したが、湧水と崩落が激しいため掘削を断念した（第 3 図、写真 3）。

遺構

調査地中央部に径 2 m ほどの溜井状の遺構を検出した（第 4 図、写真 3）。近世の陶磁器片が若干出土している。西方に隣接する溜池との関連性が考えられる。



第 3 図 A 地区南壁土層断面図（1/50）



第4図 A地区平面図 (1/50)

遺物

A地区からも遺物は出土しているが、いずれも小片である。

(4) B地区の調査

B地区は、浄水場北側の耕作放棄地南東部分に設定した（第2図、写真2手前、写真4～6）。現地表は1.8mほどである。調査面積は10㎡である。本調査区南東の浄水場施設において、縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭にかけての、微高地から開析谷への移行地が検出され、貝塚やイヌの埋葬地がみられた。B地区においても微高地端部の検出が想定された。

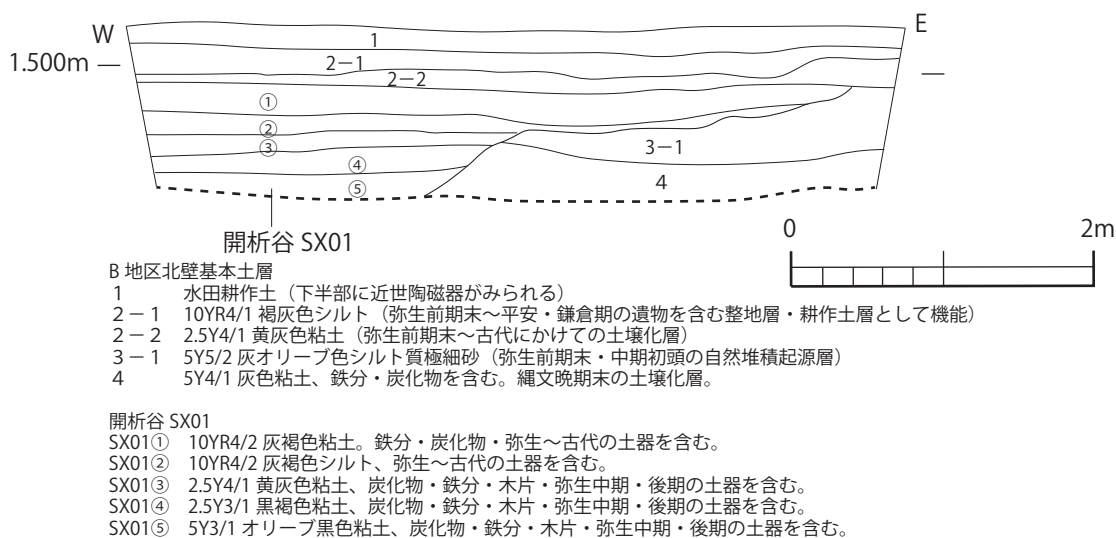
基本層序

第1層は水田耕作土である。15cmほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。第2-1層は褐灰色シルト層で、弥生時代前期末から平安・鎌倉期におよぶ遺物を含んでいる。古代から中世にかけての整地層・耕作土層と考えられる。B地区ではとくに厚く堆積し、開析谷に残された起伏を埋める整地層としての機能をうかがわせる。標高約1.4mにみられ、40cmほど堆積する第3-1層は灰オリーブ色シルト質極細砂層である。弥生時代前期末・中期初頭に開析谷を埋めるとともに、周辺の低地部への洪水砂の供給源と考えられるが、後世に若干攪拌を受けている可能性がある。標高約1mに堆積する第4層は灰色粘土層で、縄文時代晩期末の旧地表（土壌化層）と考えられる（第5図、写真4）。

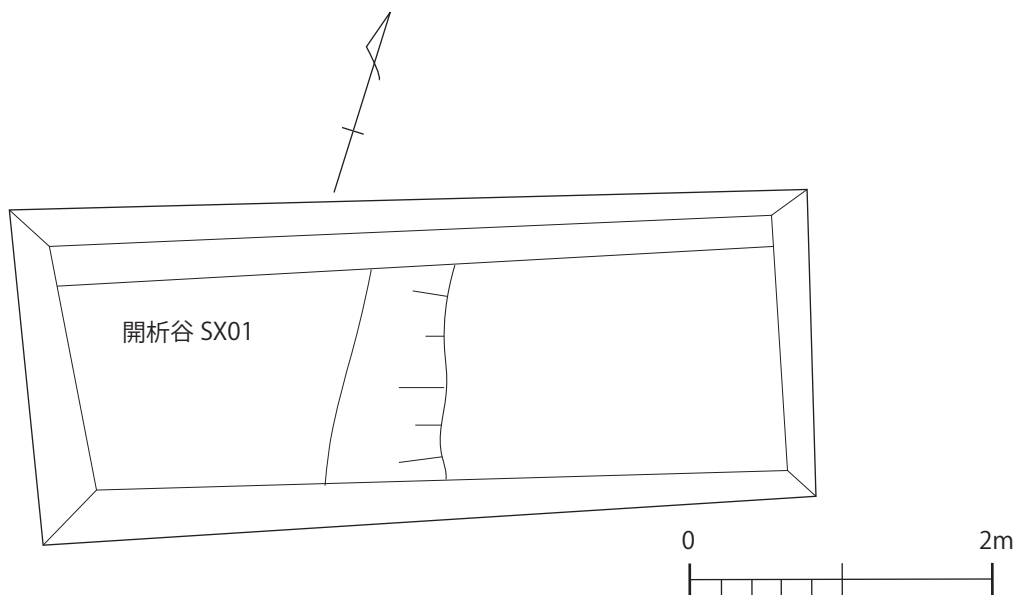
遺構

標高1.4mほどのところで、調査地西方に位置する微高地から開析谷への落ち際、すなわち東岸の一部を検出したとみられる。この落ち込みを開析谷SX01とする（第5・6図、写真4～6）。1924・25年調査によって復原された西岸からその規模を復原すると、幅約20～30mということになる。

SX01の第①・②層は灰褐色シルト～粘土層で、弥生時代～古代の土器を出土する。第③層は黄灰



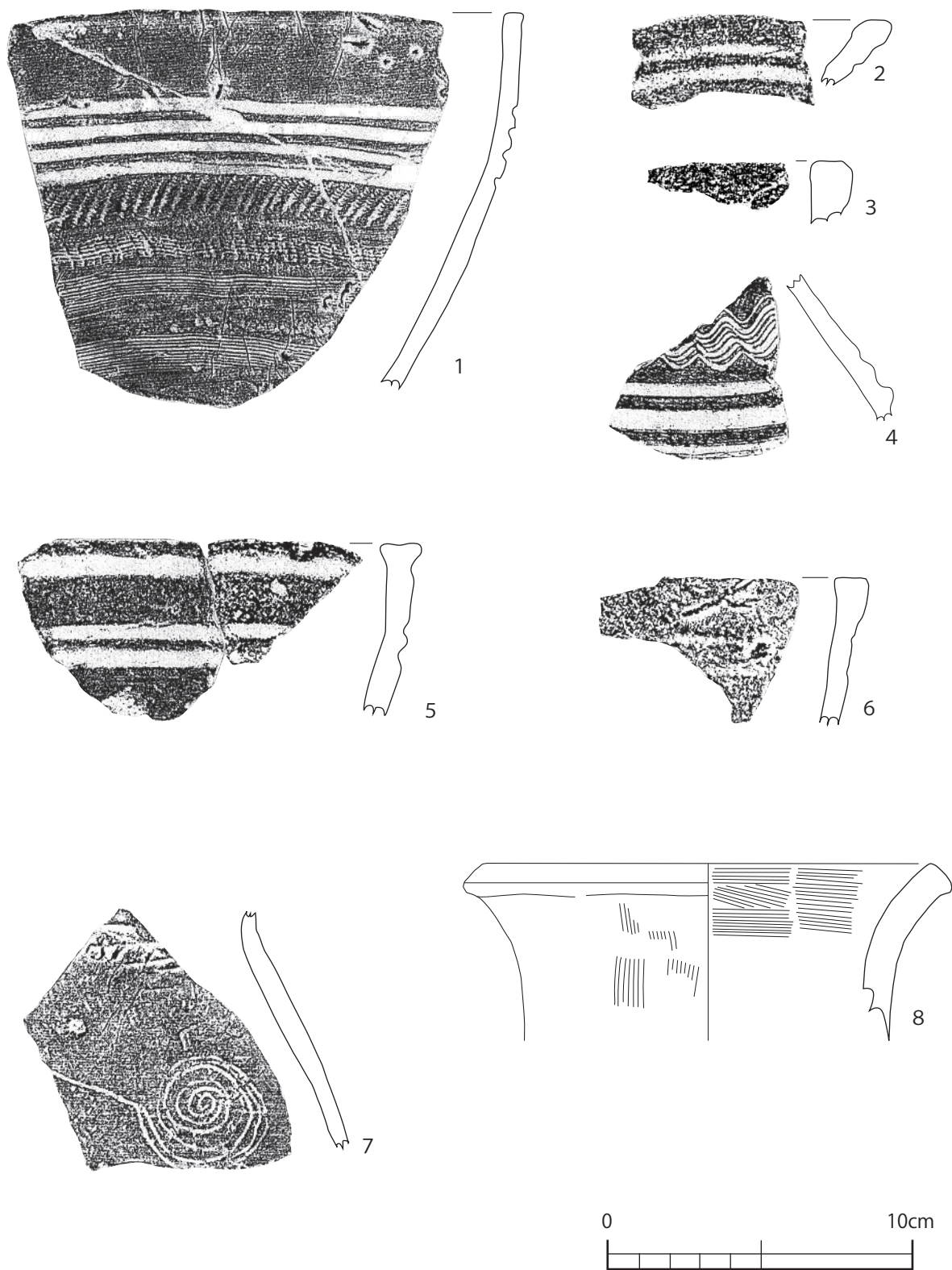
第 5 図 B地区北壁土層断面 (1/50)



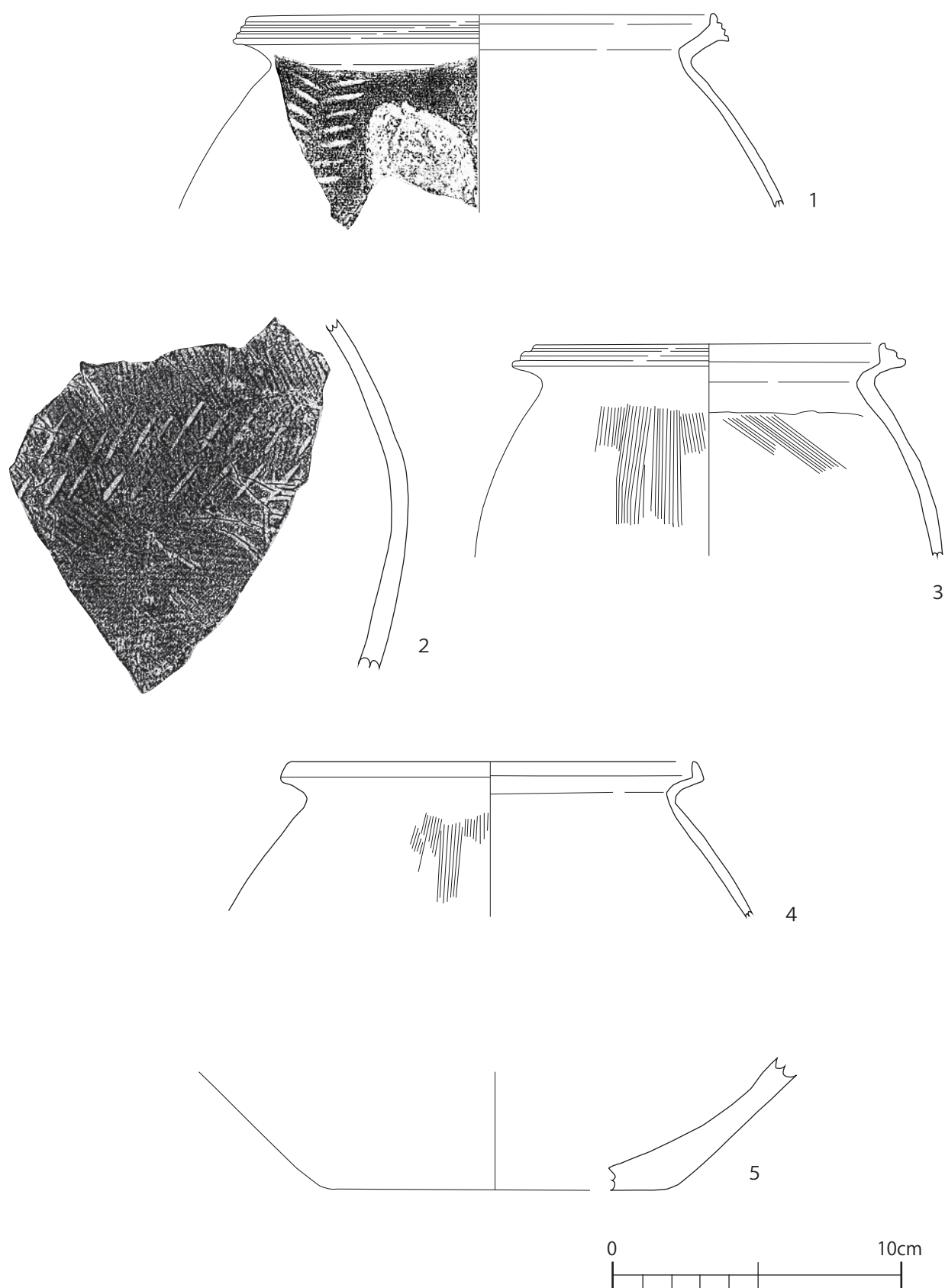
第 6 図 B地区平面図 (1/50)

色粘土、第④層は黒褐色粘土、第⑤層はオリーブ黒色粘土層で、いずれも炭化物・鉄分・木片を含んでいる。弥生時代中期後葉・後期後葉の土器を出土する。標高 0.4 m まで掘削したところで、湧水が顕著となり、調査区の崩落もみられたため、掘削を停止した（第 5 図・写真 4）。

この調査区では縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器は出土していない。しかし、既往の調査からみて開析谷が縄文時代晩期末以前から存在していたことは間違いない。弥生時代前期末・中期初頭に洪水砂の堆積がみられ、大部分は埋没し、地下水脈になったと考えられるが、凹地状の地形は健在で、弥生時代中期～後期に小規模な開析はみられた可能性がある。その後古代にかけて、上層部に残された凹地に遺物の廃棄がみられ、最終的には平安～鎌倉期ごろまでには、微地形を残し埋没は完了したものと考えられる。



第7図 B地区開析谷 SX01 出土土器 1



第 8 図 B地区開析谷 SX01 出土土器 2

開析谷 SX01 出土遺物

開析谷 SX01 第③～⑤層からは、弥生時代中・後期の土器・石器が出土した（第7～9図、写真5・6）。なお、第①・②層は、凹地として残された部分に後世堆積し、攪拌を受けたもので、古代までの土器が出土する。いずれも小片であり図示にはいたらない。

第7図1～6は弥生時代中期後葉の壺と考えられる。1は口縁部に4条の凹線を施す。以下、櫛原体による押し引き、簾状文、櫛描文2条を施す。2・5・6は口縁部に凹線を施す。口縁端部に面取りを施す。3は無文の土器である。4は壺の胴部で、櫛描波状文下に凹線文を施す。7・8は弥生時代後期の壺である。7は頸部～胴部で、口縁部に凸帯、胴部に渦巻文を施す。8は無文の壺口縁部である。

第8図では弥生中後期の甕を図示した。1は口縁部に凹線を施し、胴部に綾杉状のタタキを施す。2は甕胴部で胴部最大径付近に斜方向の短沈線を連続する。3は口縁部に凹線を施し、胴部内外面ハケメ仕上げである。4は頸部で強く屈曲し、短く立ち上がる口縁を持つ無文の甕である。5は無文の甕底部である。底面に種子状の圧痕を持つ。1～3は中期後葉、4は後期、5は中後期であろう。

第9図1は結晶片岩製の台石である。上面に顕著な擦痕を認めることができる。

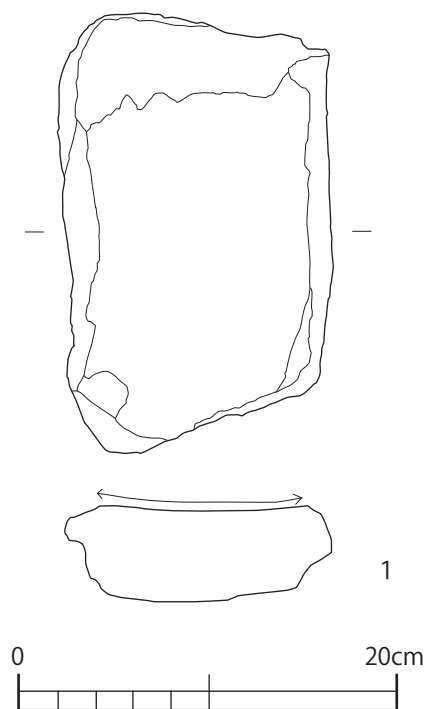
包含層出土遺物

第1層・第2-1層から多量の遺物が出土した（第10～12図）。第10図1は弥生時代後期の壺である。口縁部に凹線を施す。2は弥生時代中期後葉の高杯脚部である。裾部に凹線を施し、内面にヘラケズリが認められる。3は小型の土師器鉢である。4～7は須恵器杯身である。8は須恵器高杯、9は提瓶または壺の口縁部である。10～12は杯蓋である。いずれも6世紀代のものであろう。

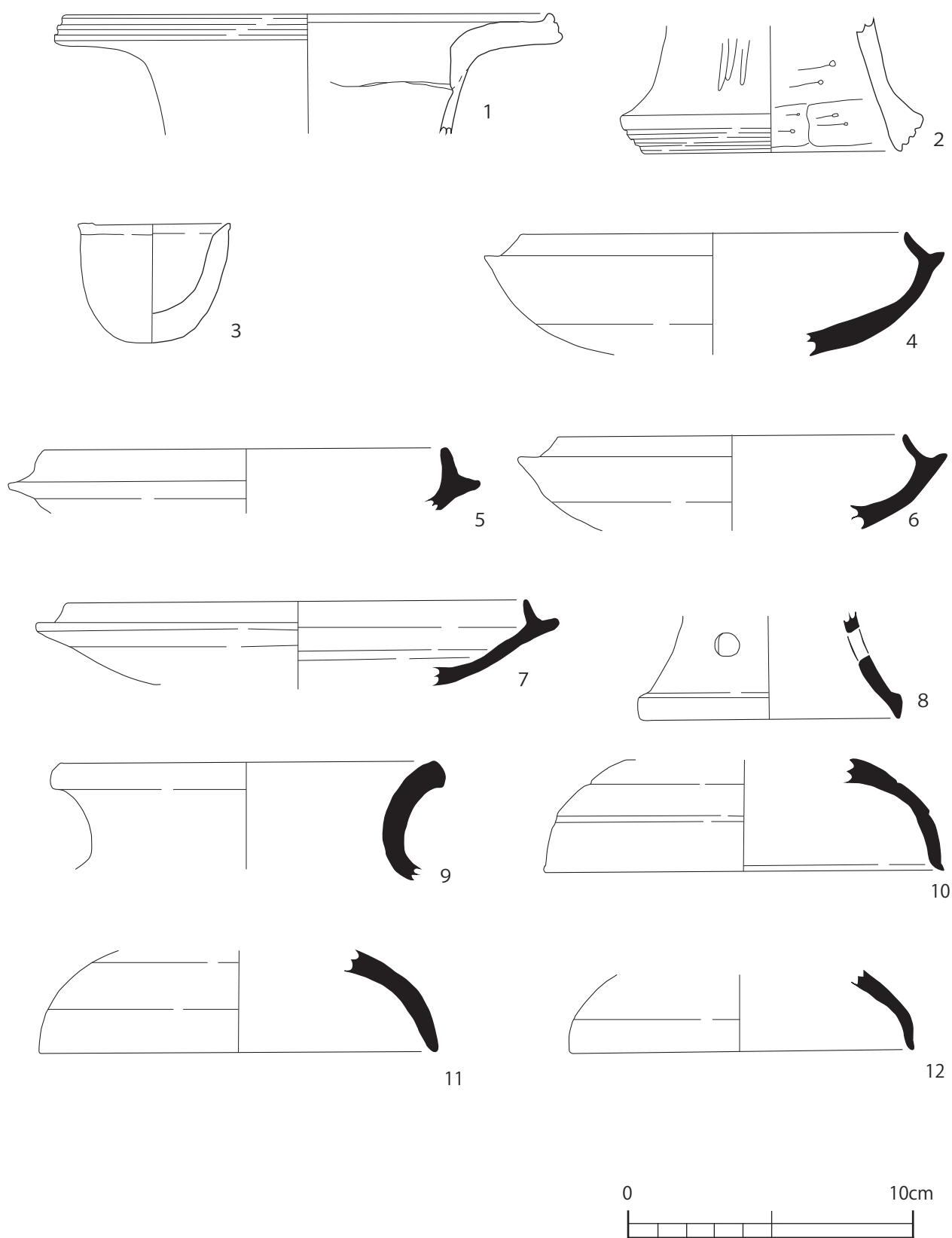
第11図1・2は土師器皿、3は土師器の高台部である。4は須恵器の高台部、5は黒色土器碗である。第2層からは瓦器の小片も出土しており、これが下限となる。6～9は土錘である。6・7は管状土錘、8・9は棒状土錘である。10は磨石で、上面に擦痕をとどめている。ひん岩である。11は敲石である。火を受けて風化が進んでいる。砂岩である。12は棒状の敲石であり側面に敲打痕を顕著に残している。線条痕もみられ、砥石としても用いられたと考えられる。緑色岩製である。

第12図1は棒状の敲石である。体部と上下端に敲打痕がみられる。硬質砂岩（変成作用を受けた砂岩）製である。2～4はいずれも石棒で、泥質片岩製である。2・3には点紋が認められる。3・4はいずれも未製品である。石棒は微高地上端（縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭包含層）を削平し、凹地部を埋める際に混入したものと推察される。

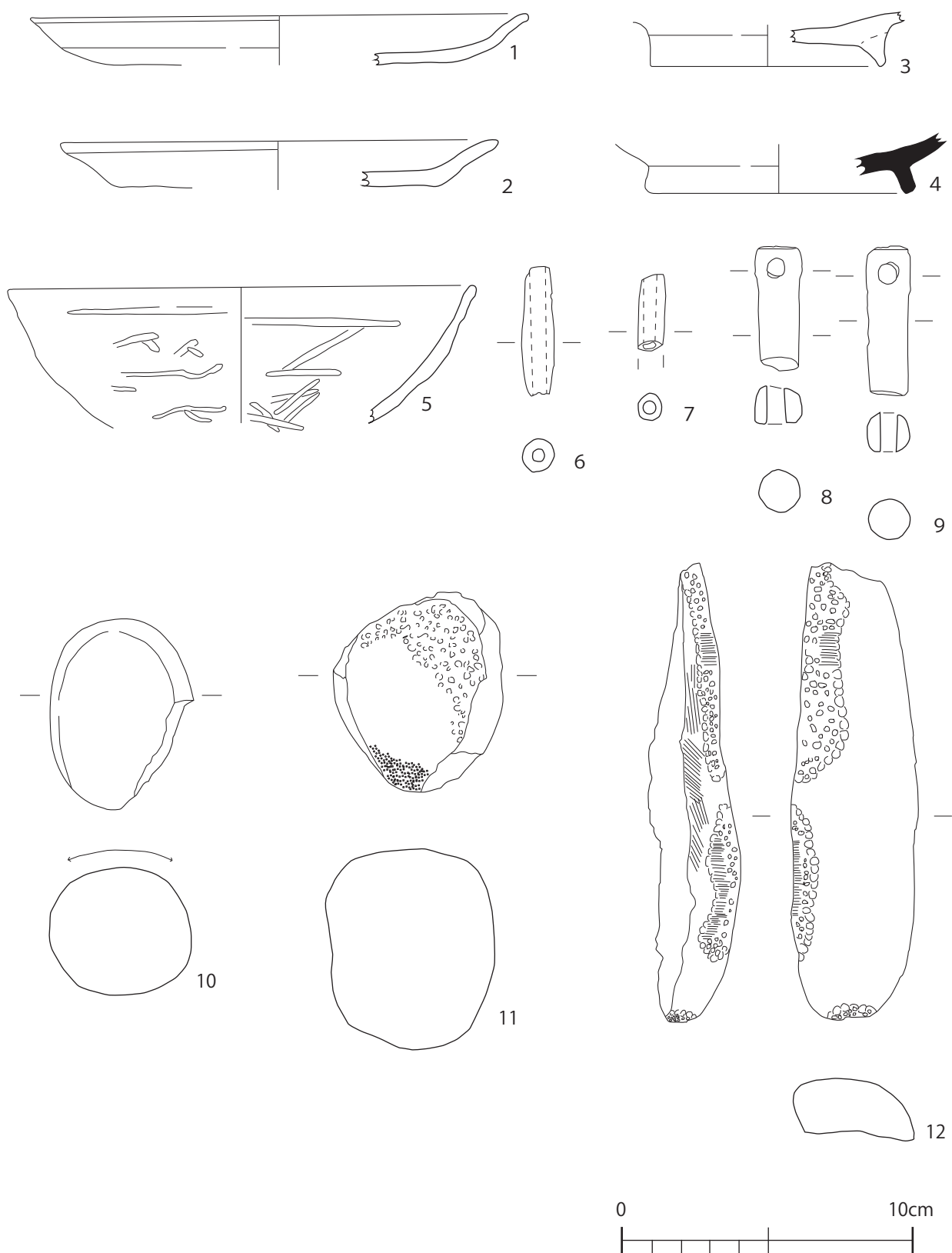
なお、第1層からは近世～現代にかけての遺物細片が出土する。



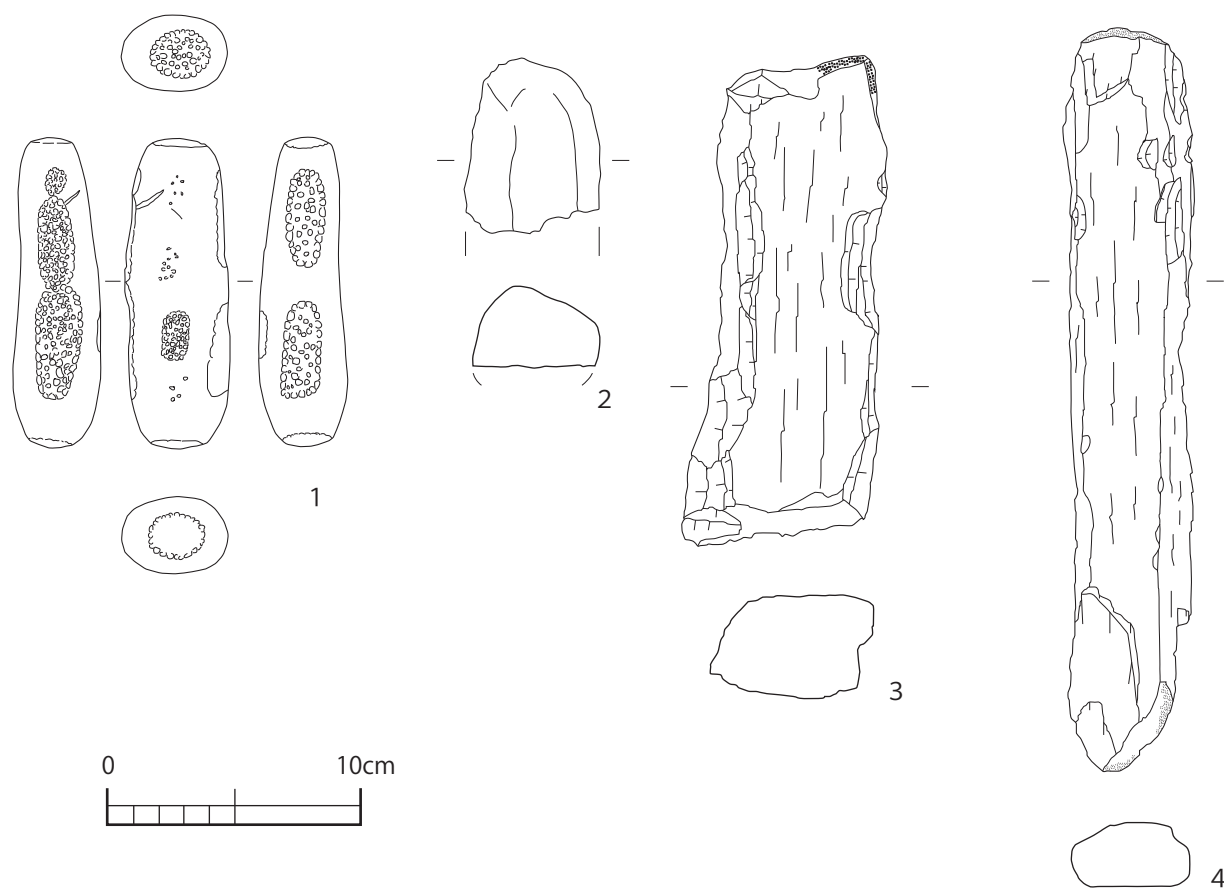
第9図 B地区開析谷 SX01 出土石器



第 10 図 B地区遺物包含層出土土器 1



第11図 B地区遺物包含層出土土器2・土製品・石器1



第 12 図 B地区遺物包含層出土石器 2

4. 徳大第 2 次調査

(1) 調査の経過

第 2 次調査は 2015 年 9 月 7 日から 9 月 25 日までおこなった。調査体制は以下の通りである。

調査員 端野晋平（徳島大学埋蔵文化財調査室長・准教授）、三阪一徳（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）、脇山佳奈（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）

調査補助 河野菜月、内田紗希、友藤 祐（徳島大学総合科学部学部生）

調査協力 東 玉子（土地所有者）、城 明弘、米沢忠之、平野義正

調査指導 勝浦康守（徳島市教育委員会）、近藤 玲（徳島県埋蔵文化財センター）、高島芳弘（徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）、早渕隆人・西本和哉（徳島県教育委員会）、湯浅利彦（徳島県立小松島高等学校）

調査担当 中村 豊（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授）

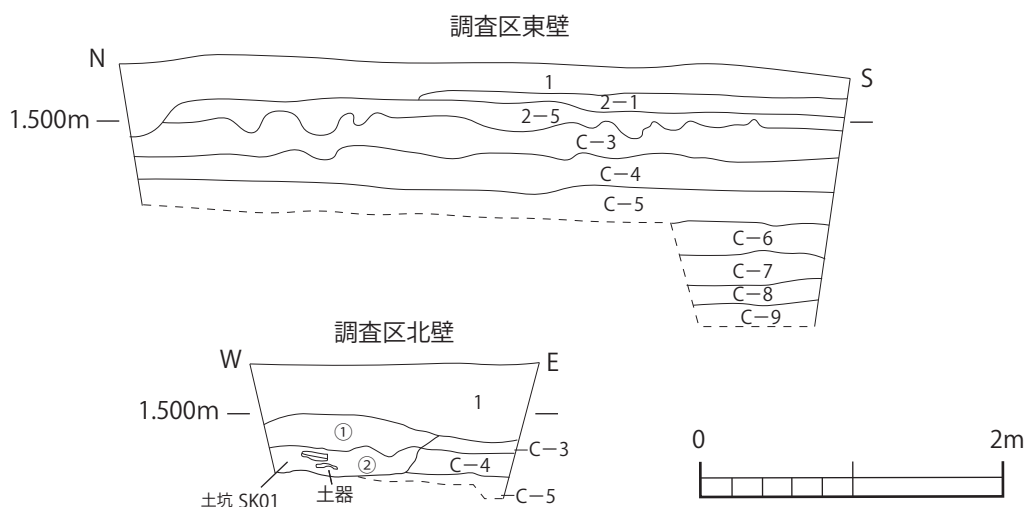
(2) C 地区の調査

C 地区は、浄水場北側の耕作放棄地北東部分に設定した（第 2 図、写真 7 ～ 10）。現地表は同じく

1.8 mほどである。調査面積は 10 m²である。B 地区の調査において、開析谷の東岸付近を検出することができた。微高地はさらに東側の民家近くに位置する可能性が高くなった。耕作放棄地内の、東側民家から 2 mは国所有の里道に相当することから、境界塀から 2 m離れたところに調査区を設定することとした。付近を南東～北東にかけて踏査すると、北東部分から凸帯文土器や遠賀川式土器らしき小破片がみられたため、C 地区を設定した。

基本層序

第 1 層は水田耕作土である。20cm ほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。直下に第 2-1 層の堆積がみられる。約 1.6 mにみられる第 2-5 層は灰黄褐色シルト質極細砂層である。縄文時代晩期末から古代までの土器を含む。B 地区第 4 層相当を起源とし、縄文時代晩期末から古墳時代・古代にいたるまで旧地表として機能し続けた土壌化層と考えられる。B 地区第 4 層は標高約 1 mにみられることから、開析谷肩付近より約 60cm 高い微高地として縄文時代晩期末にはすでに生活域として機能していた可能性が高い。この起伏を弥生時代前期末・中期初頭の洪水砂（第 3-1・2 層）が埋めたと考えられるのである。C-3 層は褐色シルト層である。標高約 1.5 ～ 1.3 mに



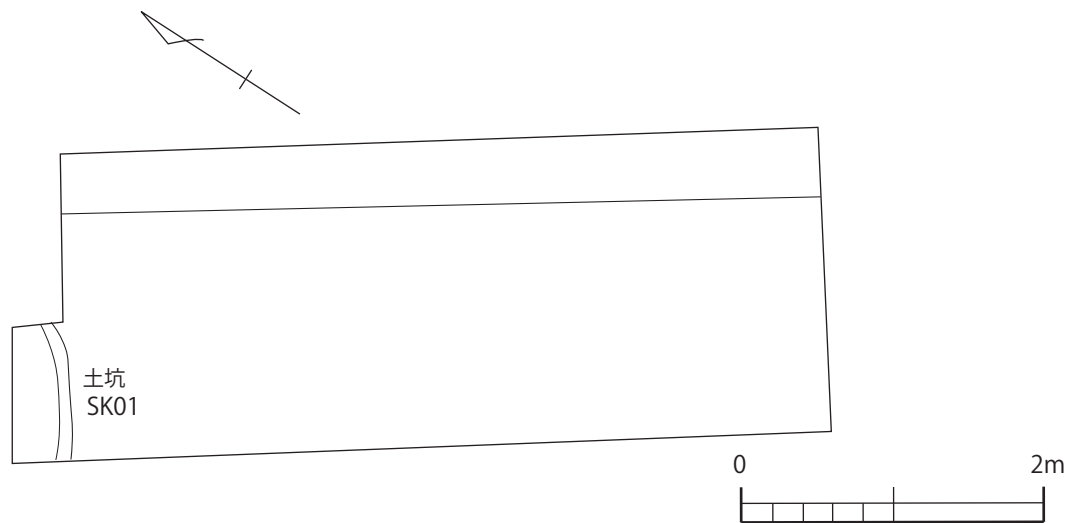
C 地区基本土層

- 1 水田耕作土（下半部に近世陶磁器がみられる）
- 2-1 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物を多く含む。（縄文晩期末～中世を含む攪拌層、平安・鎌倉期にかけて整地層・耕作土層として機能）
- 2-5 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂。（B 地区第 4 層相当を起源とし、縄文晩期末・弥生前期初頭～古墳時代・古代頃まで旧地表として機能した土壌化層）
- C-3 10YR4/4 褐色シルト。炭化物を含む。鉄分の沈着が極めて著しい。（縄文晩期末・弥生前期初頭の遺物を含む。この頃までの自然堆積層を起源とする）
- C-4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細砂。炭化物・鉄分を含む。（縄文晩期末・弥生前期初頭の遺物を含む。この頃までの自然堆積層を起源とする。C-3 層との相違は、鉄分の多少にすぎない可能性もある）
- C-5 5Y4/3 暗オリーブ色粘質シルト。鉄分を含む。無遺物。
- C-6 2.5Y4/1 茶褐色粘土炭化物・鉄分含む。有機物を多く含む。（縄文晩期末・弥生前期初頭よりも古い黒色土層）
- C-7 5Y5/2 灰オリーブ色粘土。自然堆積層。
- C-8 5Y5/3 灰オリーブ色細砂混じりシルト。鉄分沈着。自然堆積層。
- C-9 2.5Y3/1 黒褐色粘土。有機物を多く含む。（C-6 層以前の黒色土層）

土坑 SK01

- SK01① 7.5Y4/4 褐色シルト。炭化物・鉄分を多く含む。土器が多量に出土。
- SK01② 5Y4/1 灰色細砂。小礫、炭化物を含む。

第 13 図 C地区東壁・北壁土層断面図（1/50）



第 14 図 C地区平面図 (1/50)

みられる。炭化物を含み、鉄分の沈着が極めて著しい。縄文時代晩期末以前に堆積した微高地形成層を起源とする。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭に利用され、当該期の土器・石器などの遺物を多量に含む。C-4層は暗灰黄色シルト質極細砂層で、炭化物・鉄分を含む。標高約1.3～1.1mである。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の遺物を含む。縄文時代晩期末以前に堆積した微高地形成層を起源とする。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭に利用され、当該期の土器・石器などの遺物を多量に含む。なお、A・B地区にみられる同様な洪水砂起源層として、3-1・2層をあげることができる。C-3・4層はこれらと比較して、より硬く締まっており、土壌の粒子も若干粗いものを含んでいる。C-5層は暗オリーブ色粘質シルト層である。標高約1.1～0.8mである。この層以下無遺物層となる。C-6層は茶褐色粘土層であり、炭化物・鉄分・有機物を多く含んでいる。縄文時代晩期末より古い黒色土層である。標高約0.8～0.6mに堆積する。C-7層は灰オリーブ色粘土層である。標高約0.6～0.4mに堆積する。C-8層は灰オリーブ色細砂混じりシルト層。標高約0.4～0.3mに堆積する。C-9層は黒色粘土層。C-6層以前の古い黒色土層である。標高約0.3～0mに堆積する。なお、C-6・9層の土壌サンプルを採取している（第13図、写真8）。

遺構・遺物

C-3層上面より弥生時代前期初頭の土坑 SK01 を検出した（第14図、写真9・10）。C地区北端部に相当する。壺の胴部下半～底部にかけての大型破片がみられた。

C-3・4層からは、ほかにも縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の土器が出土している。また、石棒製作時に生じたとおぼしき結晶片岩の剥片や、風化面を顕著に残す中型のサヌカイト剥片など注目すべき遺物がみられるが、詳細は2016年2・3月に予定する第3次調査と合わせて報告したい。

ま と め

三谷遺跡は、1924・25 年および 1990・91 年の調査によって、縄文／弥生移行期の貴重な成果がえられてきた。これらは、いずれも微高地縁辺部の開析谷に形成された廃棄空間や祭祀空間であった。今回の調査では、旧地形を復原して微高地の位置をあきらかにするとともに、微高地上に乗ると考えられる生活域や生産域の一部を調査し、当該期の歴史像復原に寄与することを目的としてきた。

1924・25 年の調査では、開析谷が北西から南東へと向かうその西岸肩付近を調査した。一方の 1990・91 年の調査では、開析谷が北西から南東へ向かった後、大きく屈曲して北東方向へ向かう様相をみることができた。これらは、ともに貝塚がみられるとともに、多量の土器・石器などが廃棄されていることから、1924・25 年調査区の西側と 1990・91 年調査区の北側とに微高地が存在し、当該期の生活域・生産域が残されていることが予想された。事情あって西側の調査は 2016 年 2・3 月に予定する徳大第 3 次調査に委ねることとし、北側の地形復原と微高地の位置確定、生活域の調査を第一の目的とした。

第 1 次調査の A 地区は、開析谷の中心部に位置したと考えられる。調査区中央に近世の溜井状遺構を検出し、近世においても低湿であったことを示している。また、表土下均質な細砂層が厚く堆積し、湧水も顕著にみられた。

同 B 地区は、開析谷の東岸付近を検出したとみられる。大規模な谷状の落ち込み（開析谷 SX01）の肩部分を検出した。落ち込み内には黒褐色の粘土層が堆積し、弥生時代中期後葉・後期の土器がみられた。開析谷の大半は弥生時代前期末には埋積したと考えられるが、一部小規模な流路や凹地として残され、周辺から遺物の廃棄を受けていたものと考えられる。弥生時代中期末・後期には、ほぼ埋没を終えたと考えられるが、低湿地として起伏は残されていたものと考えられる。すなわち、古代にかけての遺物を多量に含み、平安・鎌倉期の遺物を若干残した整地層・耕作層が開析谷上面に厚く堆積していることを確認できた。

第 2 次調査の C 地区では、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の微高地、すなわち集落域の一角を検出したと考えられる。当該期の遺構が、標高約 1.5 m（現地表下約 30cm）の高所において確認できた。遺物を包含する土層の硬度は硬く、粒子も他所より粗粒のものを含んでいる。中洲状の微高地として生活域を提供していたものと推察される。生活域や生産域が付近に展開していることが考えられるため、周辺を拡張し調査を継続する予定である。なお、第 3 次調査では、開析谷西岸側の微高地調査も予定している。この両微高地の土地利用をあきらかにすることによって、三谷遺跡の集落像解明に近づきたいと考える。

三谷遺跡は、石棒の出土数がこれまでに 24 点を数え、今回の調査でも、すでに 6 点が出土している。結晶片岩の原産地である眉山の麓に位置し、未製品もみられ、同時代の島根県～滋賀県にいたるまで分布しているところからみても、三谷遺跡の生活域において石棒製作跡を確認できる可能性がある。また、イネ・アワ・キビ・アズキがみられる以上、集落近辺で生産されていた可能性が高いので、生産域の追求も大きな課題である^{註 6)}。

石棒祭祀とイネ・アワ・キビ・アズキの生産が共存するあり方は、弥生時代への移行を考える上で、極めて興味深い事実であると考えられる。

今回の調査によって、三谷遺跡周辺の縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の地形環境と集落景観を推定復原することが可能となった。西日本における沖積平野の縄文時代晩期の集落景観は十分に解明されているとはいいがたいので、当該期の地域社会復原に十分寄与できたと考えられる。また、この直後に平野を大規模に開発し、灌漑水田稲作経営を軸とする集落景観へと移行する過程、その背景となる地形環境史をふくめ、縄文／弥生移行期の歴史像を復原するのに貢献していきたいと思う。

註

1. 以下、開析谷とする。
2. 以下、本来一体の遺跡であったと考えられる、庄遺跡、蔵本遺跡、南蔵本遺跡を「庄・蔵本遺跡」と呼称する。
3. 旧陸軍歩兵第43連隊練兵場、現徳島大学蔵本地区西端から徳島市立加茂名中学校にかけての一带。
4. 報告の内容は、「民族問題」と「丸木舟」が中心ではある。しかしながら、鳥居龍蔵・小松真一の指導には、的確な層位の説明すなわち、貝塚や「アイヌ派竪穴」(4層上面)の上層から「固有日本人の竪穴」(3層上面)が検出される点のほか、開析谷肩部の復原など重要な所見が含まれていることを看過すべきではない。
5. この溜池は、30～40年ほど前に埋められて、現在は駐車場になっている。1947年撮影の米軍空中写真ではこれを確認できる。小規模ではあるが、大正年間の徳島市水道局建設前にはもう少し大きかった可能性もある。
6. イネとアワ・キビ・アズキの生産域について、前者は低湿地での天水田や眉山の小溪流を利用した小規模灌漑水田などが想定でき、後者は微高地縁辺部での畠作が想定できよう。畦畔の構築や畝立ての痕跡がなければその特定は容易ではないが、生産域、とくに畠跡の調査技術確立は、弥生・古墳時代以降も含めて今後の重要な課題であるといえる。

文献

- 阿子島功 1972 「Honeycomb Structure と海水準」『徳島大学学芸紀要 (社会科学)』第21巻 9-21 頁
- 阿子島功・黒田晃司 1978 「低地の微地形と海水準変動 (3) - 徳島平野南縁、鮎喰川下流沿岸低地の微地形面の編年資料」『徳島大学学芸紀要 (社会科学)』第27巻 1-23 頁
- 岡山真知子 1999 『庄遺跡Ⅲ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
- 小川国太郎・森 敬介 1960 「第2章名東郡の歴史 1 先史時代」『名東郡史』名東郡自治協会 16-35 頁
- 勝浦康守 1990 『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守編 1997 『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 勝浦康守 1999 「南蔵本遺跡 (住宅開発工事)」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』9 徳島市教育委員

会 1－25 頁

川添和暁 2012 「三谷遺跡出土骨角器について」『青藍』第 9 号 考古フォーラム蔵本 10－24 頁

近藤 玲編 2014 『南蔵本遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集

瀧山雄一 1988 『南庄遺跡現地説明会資料Ⅱ』徳島市教育委員会

瀧山雄一 1989 『南庄遺跡』徳島市教育委員会

中尾賢一 1997 「縄文海進と徳島平野の発達」『吉野川の自然』徳島県立博物館 9 頁

中沢道彦・中村 豊・遠部 慎 2012 「レプリカ法による徳島県三谷遺跡出土土器の種実圧痕の研究」
『青藍』第 9 号 考古フォーラム蔵本 25－37 頁

中村 豊編 2005 『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書』徳島県
教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室

中村 豊 2010 「庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」『年報』
2 徳島大学埋蔵文化財調査室 11－21 頁

福家清司 1984 「庄遺跡出土の墨書土器銘「賀専当」について」『高校地歴』20 徳島県高等学校教育
研究会地歴学会 16－28 頁

古田 昇 1996 「徳島県鮎喰川・吉野川下流域平野の沖積層の形成過程」『立命館地理学』第 8 号 61
－72 頁

古田 昇 1999 「徳島県鮎喰川下流域における扇状地の形成過程について」『徳島地理学会論文集』第
3 集 41－48 頁

北條芳隆編 1998 『庄・蔵本遺跡 1』徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 1 巻

前川直江 1997 『庄遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 21 集

森 敬介 1926a 「徳島市水道三谷瀘過池に於ける原始独木舟発見の顛末上」『歴史と地理』第 18 巻第
1 号 73－79 頁

森 敬介 1926b 「徳島市水道三谷瀘過池に於ける原始独木舟発見の顛末下」『歴史と地理』第 18 巻第
5 号 63－72 頁

森 敬介 1930 「阿波国発見弥生式土器紋様と銅鐸紋様との関係に就て」『考古学』第 1 巻第 5・6 号
33－36 頁

森本浩史・湯浅文則 1996 『庄遺跡Ⅰ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集



写真1 三谷遺跡 北より



写真2 作業風景 東より



写真3 A地区 北東より

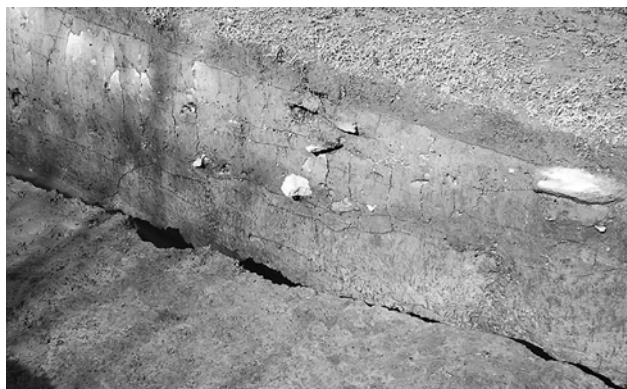


写真4 B地区層序 南東より



写真5 B地区 SX01 掘削風景 南より



写真6 B地区 SX01 遺物出土状況 西より



写真7 C地区作業風景 北東より



写真8 C地区層序 西より



写真9 C地区 SK01 南東より



写真10 C地区 SK01 遺物出土状況 北より